

自分等のやうな他郷人が、二三日の滞在研究では到底盡せるものではない。どうしても篤實な愛郷家の研究に待つの外はない。この種のものでもまとまつたものがあるかと思へば、それさへも容易に知ることが出来ない、あちらの古老や里人などに傳聞してまとめたものが、即ちこの見聞私記である。

従つて、史的考證のあるわけではない。また相當の誤謬もあることであらう。殊に下田人より觀れば、こんなことは百も承知といはるゝかも知れない。しかし他郷研究者には多少の資料になることでもあらう。

そこで、かうしておけば、下田の篤志家において必ずや正誤修補されることであらう。ここにおいて、この種のもものが逐次完成されて行く、自分は世評を甘受しつゝ敢てこの拾石を置いたわけである。この點幸に諒せられんことを望む。

○吉田松陰・金子重輔米艦搭乗船出之地

安政元年三月廿七日の夜（正確には廿八日午前二時頃）松陰先生が金子重輔と共に米艦搭乗のため、柿崎の船宿九右衛門の小舟に乗つて漕ぎ出されたといふ場所は、柿崎辨天祠に向つ

て右沖角に二三の低い巖があり、いまそこに電柱が立つてゐる。このあたりの様であつて、昔はこの邊は陸地であつたとのことである。

○戸々折

松陰先生等が米艦搭乗の際、乗り捨てられた小舟が漂着した場所である。これは、柿崎辨天より向つて左手に半圓形海邊を隔てた處に、山磯が崩れて赤はげに見える處の磯邊である。當時の古圖によると、「ト、リ崎」と記名され、その手前に赤島といふがある。現今里人は「ト、ホリ」と云つてゐる。

○福浦

米艦人が松陰先生等をバテラで送りかへした場所であつて、戸々折と須崎との中間海岸である。最も一説には、戸々折と柿崎との中間海邊であつたといふものもある。

○玉泉寺

柿崎辨天祠の反對側、山麓にある曹洞宗瑞龍山玉泉寺といふよりも、米國最初の使節タウンセント・ハリスが總領事館を開き、四ヶ年間在任したことでも有名である。此所に松陰先

生が借用されたと、俗にいふ太織袷服が遺物として保存されてゐる。十數年前寺は改築されたものであるが、形は昔そのまゝである。いま寺の説明書によると、「安政元年三月廿七日の夜、松陰先生宿志を果さんとして、柿崎辨天島より當山開基家九右衛門の傳馬舟を漕ぎ出し、ペルリ乗船ポーパタンに乗り込みたるも、志成らず、遂に當村名主(上ノ山)平右衛門宅に自首せし折、名主より借用せる衣服なり」と記してある。しかし、これははつきりしないといふ説もある。

○柿崎名主増田平右衛門の宅跡

松陰先生が福浦上陸後、漸くたどりつかれた名主下役忠右衛門の案内で自首に行かれた宅である。これは、玉泉寺の左手の山中であつて、柿崎國民學校より東約壹町半、舊白濱街道柿崎區上ノ山といふ所にある。當時の名家は既にないが、その子孫は現存されてゐることである。増田の家紋は二重圓に「かたばみ」である。

○柿崎辨天祠

祭神杵島姫命の外に、いまは松陰先生も合祭されてゐる。建物は當時のまゝであつて、

格子戸の外より薄暗い内部を覗き、此所が二十五日の夜松陰先生等の潜伏された所かと思へば、落涙滂沱低徊去る能はずの感がする。

石段の右側下に七生説の石碑がある。これは松陰先生の字を擴大して彫つたものではあるまいか。これよりも、この建碑については芳しからぬ世評がある、實に困つたものである。辨天祠邊の海濱には、別に名前はないうであるが、昔はその手前あたりを「ひさしかたはま」といつたやうである。

○廿六日の海濱村落

『回顧録』に「廿六日某村(村名已に忘る、柿崎村東一山を越るの海濱村落なり)に往て漁家に入り、朝食し、又睡ること久し云々」とある、村落は、柿崎より東方小山を越し、當時戸數七十戸位の一部落があつて。字名を「外浦」といつた。恐らくこの部落であつたらう。

○坂の段の茶屋

『回顧録』の廿六日の部に「午食終り柿崎に至る。雨降り宿すべき所なし。某所(地亦柿崎に屬す、下田に來る時經る所、山坂上に一家あり、酒食を賣つて生とす)に往て宿す」とあり、これ

は、東海岸の白濱より柿崎に通ずる舊街道、柿崎上野山坂の段といふ處の一番高い所に、先年まで「小松野」といふ一軒茶屋があつた。恐らく此所であつたらう。

この小松野は、天保年間頃より上ノ山部落、現富藏屋隣に居住してゐたのであるが、不幸にも放火の災に遭ひ、當時上ノ山部落は大半焼失したのであつた。そこで、上ノ山坂ノ段に小さな茶屋を建て生計を立てゝゐたのであつた。元來白濱より下田に通ずる街道であつて、駄菓子屋休み茶屋であつても相當暮して行かれたのであるが、下田より外浦經由伊東街道が開通してよりは往來人も尠なくなり、遂に十年程前現在の所に轉住し、農業を生計とすることになつた。子孫はいま尙現存してゐるとのことである。

その小松野は、松陰先生等が下田事件最後の一夜を明かされた大事な場所である。しかるに未だその跡が判明しなかつた。けれど、今回の研究で略見當のついたことはこの上ない幸である。

○金子重輔行狀記之碑

下田八幡神社境内、社殿に向つて右側に三個の石碑がある。中央の大なる忠魂碑の右にあ

るのがそれである。松陰先生の金子重輔行狀記の全文を彫り、碑石は品川子爵の寄附、題字は山縣有朋の揮毫になつて居て、書家は逐波崎嵩といふ人である。

松陰先生が金子をして千歳不滅の人物にしてやりたいといつて書かれたこの行狀記が、門人の品川子爵の斡旋によつて、一つには師の遺志繼承、二つには同門先輩金子のために、そして同門山縣と協力して建碑されたものであつて、こゝに行狀記と共にこの建碑に躍々たる眞生命があり、また殉國教育の精神が光つてゐる。

これはもと八幡神社参道左側の國民學校の裏の巖角上に、明治二十八年十二月柿崎辨天を睥睨して建てられたものであるが、十數年前學校改築につれて、これ程大切な精神教材が現存の位置に無心にも移されたものである。

この建碑當時の下田の世話方代表者としては、篤志家醫師淺岡杏庵や賀茂郡長池田忠一氏等の氏名が見えてゐる。

○下田奉行所跡

松陰先生等が公式に取調べを受けられ、江戸へ引き渡されられた場所である。始めは、

下田町海善寺かいぜんじの隣り東傳寺とうでんじ(稻田寺)に假役所を設け、續いて安政二年に工を起し三年より開所ひらに至つたもので、稻生澤村本郷中村いのみやせらほんがうなかむら(今の中村橋を渡つて左側の田圃約一千坪、工費壹萬六千兩)といふ所に設けられたものであり、相當大規模のものであつたやうである。故に松陰先生關係は東傳寺時代である。(一説には下田海善寺入口右側舊郡役所跡といふものもあるが、しかしこれは誤りであらう)

○黒川嘉兵衛の宅址

下田奉行所で、松陰先生等を取調べた當時の下田支配組頭といふ大立物である。これは下田警察署の通りを女學校に向つて少し行き、左側の路道を入つたところに福音教會がある。その前邊まへあたりであつたらしい。(これが廣岡町通稱加賀屋の裏手邊といふ處のことであらう)

○吉田松陰拘致跡

「回顧録」廿八日の部に「夜四つ時下田町柿崎村の役人に預け、是を長命寺ちやうめいじに置く」とある眞言宗長命寺しんごんしやうめいじ(一本に延命寺ともいふ)の跡である。いま下田警察署門の左側に一本の老松があり、その下にこの標碑がある。

即ち下田警察署が長命寺跡であつて、その後方に泰平寺たいへいじがあり、その境内に觀音堂くわんのんどうがあつた。この觀音堂が「下田警察署裏の石堀の所が觀音堂で、それに兩人を入れ下田柿崎兩所の者が日夜詰めて番をしてゐた」と、一部に謂はれてゐる觀音堂であらう。長命寺は明治初年度寺となり、後、下田七間町長樂寺ちやうらくじに移つたものである。然るに下田警察署が平滑の獄の跡でありと稱し、或は觀音堂は向ひの下田區裁判所の地位であるといふものもある。かやうに下田における松陰先生の史跡については研究者の間においてさへも區々たる意見のあるのは如何にも残念である。殊に下田における松陰先生取調關係の如き、公文書的なものにおいても、往々事實と相違してゐるにはあらざるやと思はるゝ點のないこともない。例へば、「須崎にゆき、村役人を頼んで舟を探す云々」の如き、或は「二十八日に直に黒川の配下が柿崎に引き取りに行つた」といふが如き(何れも本文中に詳論す)余程深重なる研究を要する諸問題の残されてゐることを指摘しておく。

○平滑獄址と平滑金太郎宅跡

下田警察署前通りを約一丁程行くと、女學校の前に出る。その少し行き過ぎた道路を隔てた

山側のあたりがこの金太郎の屋敷跡のやうである。(少し手前の三角點の所との説もある) 平滑の「番太」と呼んで、入牢者などをよくもらひに行つたものであるとの逸話が残つてゐる。この金太郎の隣りが平滑獄であつた。丁度現時の監獄の隣に典獄の官舎があるやうなものであつたらう。

○岡 方 屋

松陰先生等が下田で宿まられた旅館である。下田屋或は岡村屋とも云はれてゐたやうである。現今の廣岡町の下田屋がそれであつて、八幡神社の方に行けば右側にある。屋號はそのまゝ下田屋(現在は田村某經營)であるが、建物は全部改築されてゐる。然し當時の材料が二階に使用されて居ると云はれてゐる。屋上より海邊を眺められたといふが如き、昔を偲ぶよすがもないことは如何にも残念な事である。

松陰先生等は最初下田屋の隣りの清水屋といふ宿屋にとまられたのであるが、平家のために下田屋の二階からのぞかれて困るといふので、替はられたといふ逸話も残つて居る。一體、松陰先生等は どうしてこんな場所に宿屋を定められたのであらうか、このあたりは、

支配組頭や與力同心等の宅も相當にあつて同心町とさへいつてゐたやうである。謂はゞ御役所町のやうである。従つて、御役所關係の様子を知るには便利であつたらう。それに米人上陸交渉などの關係をも探知するにはよかつたものではあるまいか、かやうなわけで却つて危地に入つて事をなさんとされたものであらう。それが廿日以後身邊の危険を感じられて蓮臺寺の方に潜居されたものであらう。

○土佐屋の跡

「回顧録」廿五日の部に「船頭土佐屋、數々往きて是を問ふ云々」とあるものである。下田には土佐屋なるものが三軒あつた。これは、七軒町角の土佐屋のやうである。松陰先生が残された書翰類は津波で流失したとのことである。

○武山(たけさん)

下田より海岸傳ひに柿崎に至る左側の山である。其山形に因んで俗に「ねすがた山」(稻生潭村本郷邊より眺めたる景であつて武山は其一部である)ともいつてをり、又山中に天台宗萬藏院があるので、萬藏山ともいつてゐる。昔は柿崎の武富山といつて、式内多祁富許都久和

氣命神社があつた様である。「回顧録」に屢々出て来る山である。

○稻生澤川

「回顧録」廿五日の部に「下田に一川あり、川中小船數多あり云々」とある。これは稻生澤川いのみぶせがはの downstream のことであらう。

この下流下田橋附近には、昔より小漁こりしをなす小舟がいつも澤山つないであつた。この小舟を利用されたものであらう。そしてこの小舟を捨て、上陸された所は、現今の松樹防風林あたりであつたらう。昔はこの邊に濱洲があつて武ヶ濱造船場といふものがあつたやうである。若し沖おきに出られたものとするなれば間戸ヶ濱まんどへの廻り角手前かどに、昔は女郎島ぢよらうじまといふ大きな巖があつたやうであつて、このあたりの海濱であつたらう。

本見聞私記をまとめるには幾多の人々に問ひ合せて見た。しかし、仲々要領を得なかつた。幸に白濱村原繁太郎先生及び黒船社森一氏の垂示によつて、こゝまで漕ぎ付けたのである。謹んで感謝の誠を捧ぐ。

村山庄兵衛氏を訪ふ

昭和十六年八月十五日

八月十四日、颱風が東海道あたりを襲ふとの豫報があつた。それがためか、東都は暴雨、午後三時五分東京驛を發し、同六時伊東着、直に下田行乗合バスに乗る。伊豆の地も同じく、時に雨あり風亦強し、天城の連峰を烟雨の中に遠望し、海岸傳ひに曾我兄弟で有名な赤澤山をよぎりし頃は、日は既に暮れ、風雨もまたつのである。熱川温泉を過ぎ、大川を経て稻取で乗換へ、河津三郎の故地たる河津温泉を過ぎ、峰温泉の白煙を左手に望みつゝ、山路に入りし頃より、風雨稍々おさまり、暗夜の中に樹林山麓を走り、稻生澤川畔にて下車す。右折して歩行約十分にして蓮臺寺温泉彌五平旅館に投ず。まさに午後十時。

十五日早朝、直に「吉田松陰驛寓之跡」(大正三年三月賀茂郡教育會建立)の標石ある村山庄兵衛氏を訪ひ、刺を通じて一應の挨拶を述べ、かつ同夜の再會を約す。これ此日天候險惡のため、先づ下田方面の調査を終へて蓮臺寺に歸へり、改めて同所關係を探聞せんとしたればなり。

午後三時下田より旅館に歸へれば、偶然にも河野通毅先生の來訪を受く。旅窓の邂逅、驚愕茫然の外なし、これ全く松陰先生神靈の引き合せによるものなるべく、互に感激感謝し、一時間餘下田見聞談合の後、氏は修善寺に向つて出發せらる。あゝ何たる奇遇ぞや、あゝ何たる神靈の加護ぞや、互に死に至る迄の研究を堅く誓ふ。

同夜約に従ひ、村山氏を訪ぬれば、欣然余を招じて揮毫さへ求めらる。余も快哉この上なし、依つて氏が談話の節々を書き留め、後日の資に供せんとす。尤も氏の談話の多くは、松陰先生入湯の當時、先生を自宅に案内せし、曾祖父行馬郎の娘にして、親しく松陰先生の左右に侍し食事給仕などの世話せし祖母まつ（明治三十八年七十餘歳で死亡）より謂ひ傳へられたるものにして、これ等は既に「松陰先生と我が家」と題し、公刊されゐるものなれば、ここにはその以外にして余の質問に答へられ、或は氏が少青年時代の記憶を辿り起され、或は他より傳聞されたる事共を聞き取りながら、自分の私見をも加へて書きまとめたるものなれば、下田見聞私記と同じく、正確なる史料によるものにあらざるは勿論、また幾多の批判的世評もあるべし。これ豫め余の感念し居れる所である。願くば愛郷々人に於て研

究の上、更に叱正を賜らば望外の欣幸である。

行馬郎が松陰先生と初會見したのは、大湯（いまの共同風呂）であつた。行馬の宅には内湯があつた。さすれば、何故内湯を外にして大湯に行つたのであらうか。又、その後も松陰先生が深夜に大湯の方に行かれたのであらうかと云ふ疑問がある。これに對し、村山氏（當主）は次の様に説明されて、自分も成程と首肯が出來たのである。

蓮臺寺温泉は關東震災後源泉が著しく減退し、一時は全部之を中止し、三ヶ所の源泉に集めて現在の蓮臺寺温泉各戸に分流せしめてゐる。

しかし、昔の所謂上野湯は、諸所より湧出し、しかも各温泉がそれ／＼特異の效能をもつてゐて、實に效驗の顯著なものであつた。行馬の内湯は俗に謂ふ荒湯であつて、毒氣や眼病などには特效があつたが、しかし浴後の湯さめが早い缺點があつた。しかるに大湯の方は皮膚病や神経痛諸病によくきいて、浴後の湯さめがなかつたのである。そして、行馬には疝病があつたので、かうした關係上、時々大湯に行つたものである。松陰先生は皮膚病、行馬は

疝氣、かうした因縁が大湯の關係を結んだものであらうと。

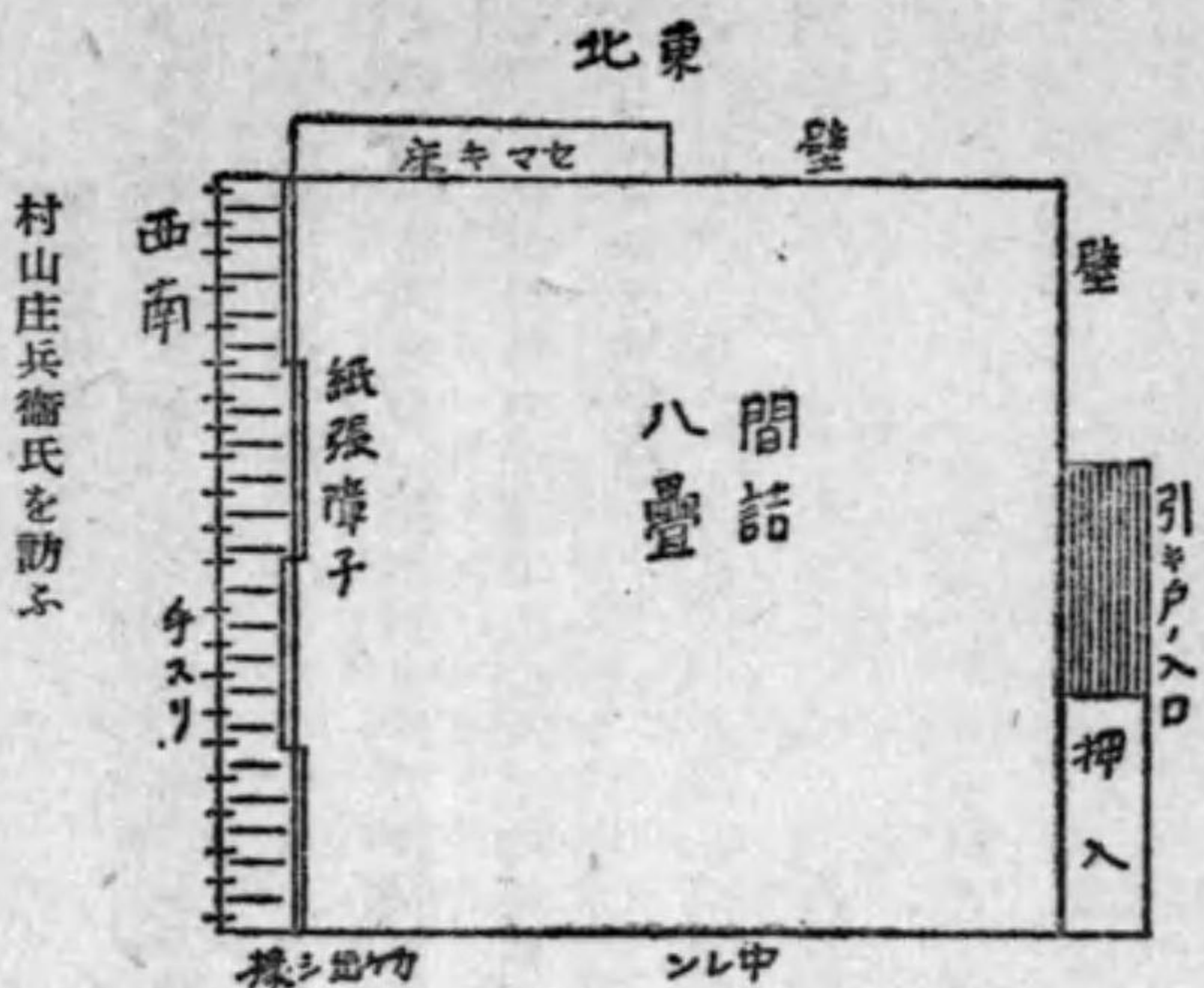
○
行馬の遺品を見ると、さすがに漢方醫だけあつて、漢藥の包みや漢方醫字典などが相當に残つてゐる。そして、その「ひぜん」の處方箋としては「十葉・大黃・山歸來・忍冬」といふ漢藥名を配してゐる。行馬は、これを丸藥として先生に與へて服用せしめ、更にまた大黃の根をおろして、これを醋でねり、先生の局部に塗りつけたとのことである。

○
松陰先生は、いつも愛用の矢立で書きものなどをしてゐられたやうである。しかし行馬が先生に御使ひ下さいといつて差し出したといはれて居る硯と小引出しといふものがいままも残つてゐる。時には、松陰先生も使はれたことであらう。小引出の底裏には「嘉永三年作之、蓮臺寺上野温泉村山庄兵衛」と自書して居り、硯の裏には「天保□□□之」とかすかに刻まれてゐる。時代的には、先づ符合してゐるやうである。尙當時使用されたといふ机や食器類などがいままも残つてゐる。

○
松陰先生と行馬との間には、よく長崎あたりの話が出たやうである。行馬は醫學修業で行つたことがあり、松陰先生は鎮西旅行以來の因縁の深い長崎である。かうしたことが、餘程感

情的にも二人の間をゆつたりと温くしたもののやうである。そして、行馬は床に神農の幅物を掲げて、先生をもてなしたといはれてゐる。「神農」といへば醫者の方では大切なものであり、松陰先生もこの神農に對しては日頃から相當の敬意を表してゐられたものである。

○
松陰先生の潜居してゐられたといふ部屋はどんな處であらうか。村山氏の宅の入口内庭



の右側に内湯がある。九尺と八尺位のものであつて、二三石段を下る位の低部に湯槽があるが、關東震災以後、湯が出なくなつたとのことである。

この内庭の天井の一部が引き戸で仕切られて、その上に天井の低い間詰り八疊の部屋があつて、これが行馬の居室であつた。行馬は、この自分の部屋を松陰先生に與へたものである。(一八五頁別圖参照)

大井翁の盛事

大井伊助翁(大阪の人)と余(著者)との因縁に就ては、既に序文の一節に記して置いた處である。重ねてその動機と計畫概要とを聞知した所は次のやうである。敢て記して後日の資に供せんとする次第である。

翁の曰く

昭和十六年四月廿二日であつた。武藏野學院熊野院長の懇懇によつて、下田における松陰先生の遺跡を探り、稻生澤村蓮臺寺なる村山庄兵衛氏の舊宅を訪ねたのであつた。松陰先生が下田踏海決策のため潜居されたその跡も、悲風慘雨、春秋既に八十有星霜、其荒頽せる慘狀を見ては、そぞろに暗涙を催し、低徊去る能はざるものがあつた。歸路、熊野院長は車中において松陰先生絶命の詞たる「吾今爲國死云々」の一首を微吟さるゝこと五回、自分も亦自ら悲痛慨嘆したのである。そして、大阪に歸り「吉田松陰之最期」(拙著)を靜讀して、益々松陰先生が至誠殉國の誠忠を知るに及び、斷然熊野院長の意見を求め、この腐朽

荒頽せる舊宅を修復復原せんことを決意したのであつた。爾來波頭氏を始め諸友にこの計畫を謀つたのであるが、余(翁)を立たしめんとしたものは、熊野院長であり、更に決意を鞭打ちたりしものは先生(著者)の著書である。余が波頭氏の東道により朝野兄と共に先生を訪ねたるは故なしとせざる所である云々——とて、其後の経過を回示されたのであつた。

交渉顛末概要日記

大井 伊 助

五月七日 大阪府史蹟調査委員(元大阪府技師)池田谷久吉氏外二名を村山氏宅に派し、更に外岡和平治氏(元白濱小學校長)と共に同家を調査し、十日歸阪す。

五月二十七日 池田谷氏復原工事設計書を作る。

七月十四日 熊野氏を以て熊谷大政翼賛會總務局長・川村社會局長兩閣下の添書により、静岡縣知事及伊能學務部長に面接、右復原に付て、知事を會長とする顯彰會(假稱吉田松陰・南史蹟顯彰會)を設立され度旨上申をなし、翌十五日熊野氏・外岡・波頭・朝野諸氏と共に伊能氏に會し、詳悉陳述し大體其同意を得たり。

七月廿五日 伊能學務部長親しく蓮臺寺村村上氏宅遺跡を訪ねられ、往事を偲ばれて感

概深かりしものありしやの趣、外岡氏より來書ありたり。

七月三十日 伊能部長に復原設計書と共に「吉田松陰之最期」を贈る。

八月十三日 川合氏の懇懇により縣知事宛に史蹟指定申請をなす、福本氏の意見書を添附す。

八月十七日 依命工事豫算書を提出す。

八月十九日 文部省より古谷氏蓮臺寺に於ける松陰先生の遺跡に付、非公式に視察調査せらる。

九月四日 川合氏より來信、要點は左の事項なり

現地盤のまゝ修理すべき方法はなきや。

確證的文獻はなきや。

よつて同日池田谷氏と協議の上、現地盤のまゝの設計に変更し、文獻に付ては福本氏に依頼す。

九月六日 福本氏の意見たる「確證的文獻なし然れども他の事實より推斷して確實なり

大井翁の盛事

一七

との意見書」を部長に送る。

九月十四日 熊野氏より來信、「大兄健なりや、喜ぶべし、只今伊能學務部長より正式書狀來る、其後修繕に關しては地盤を其儘として行く事に方針を定め候間、此上は書類整ひ次第假指定の手續をする豫定に候。顯彰會の件は文部省にて假指定の方針決定次第發會式を舉行する様諸事準備を進め居候。云々」

(附言) 今回の工事は私がやるのが事實なるも、將來のため顯彰會にてやるものとして、要は小生がその會に工事費等全部を出捐するといふことに御解釋を願へばよろしく候。

十月廿七日 松陰先生の命日を期し、盛大なる顯彰會發會式舉行せられ、諸事豫定通り順境に進捗す。

下田 雜 詩

福本 椿 水 作

吉田 松陰

安政元年三月廿七日。夜。於返州下田港。搭乘米艦。欲航于海外。事不成而就縛。投下田平滑獄。

時維安政甲寅春。幾旒星旗翻三豆津。強求和親調盟約。志士憤然嚙齟齬。三百諸侯徒逡巡。巾幗群中有蘇洵。知已知敵兵家訣。誓欲決策安帝辰。武山細雨三月寒。湘宮祠畔風颯瀾。小舟漕出漁村夜。怒濤拍天心力殫。天乎命乎搭艦難。大志蹉跌空碎肝。拘致苦吟下田獄。獄裡猶說憂魂丹。星霜百年謳忠純。蓮臺寺畔淚史新。湘宮祠邊巖角立。里人至今說斯人。

下田港頭有感

下田 雜 詩

一八

奇謀蹉跌志益豪。憂國至情淚滿袍。海氣濛々風雨夕。雄魂猶帶響哀濤。

柿崎湘宮祠 其一

丹心一片虞愁深。乘出小舟鐵石心。祠畔巖角回首望。夕陽萬里映波沈。

同

其二

渺茫大海月殘時。祠畔松籟有所思。休說飛鴻無限恨。怒濤千里使人悲。

同

其三

山依舊而秀。水依舊而寒。祠畔面風立。老松翠綠殘。欲問百年事。大洋幾廻瀾。

玉泉寺 松陰先生着衣

夏草埋山寺。橋邊一水流。無窮懷古恨。啼鳥更添愁。

武山

志望未成愁緒多。可知踏海去來波。武山々雨蕭々夕。志士痛憤定奈何。

坂之上、小松野茶屋跡

踏海奇謀空無成。捨舟上陸夜三更。辨天忽聽曉鐘響。潛伏山家愁恨生。

下田平滑獄跡

豆洋踏海夢魂迷。縲紲不倦猛氣凄。獄畔老松尋往事。徘徊回首夕陽低。

先師獄中讀真田三代記

休言英傑事空遠。時運不廻覺昨非。獄裡閑看三代記。古今史業思依々。

蓮臺寺 松陰先生入湯潛伏之地 其一

蓮臺寺畔索幽居。報國只期身後譽。踏海奇謀人識否。夜深殘燭閱投書。

同

其二

隻手空期廻狂瀾。壯圖躑躅夢空殘。腐儒何識千秋策。俗吏徒偷一日安。豆南山河餘涕淚。蓮臺寺畔幾辛酸。身後猶有經倫存。昭和時人正衣冠。

訪蓮臺村村山庄兵衛氏

松陰先生踏海決策之宅

荒檐頽壞對秋暉。惆悵英雄心事違。休言志謀期水泡。幽囚一卷漏天機。

蓮臺寺大湯

三更更盡萬家眠。客路悠悠思悵然。恨殺大湯一夜夢。覺來空憶下田船。

呈大井翁

翁夙私淑吉田松陰。會有蓮臺寺村松陰先生潛居修理之舉。余不堪感激。賦以呈之。

之。

收故人遺稿。默讀焚華香。按先賢史蹟。私期無遺漏。君元有俠氣。夙憂風教荒。以一身常垂範。諄々說綱常。憶起蓮臺寺畔夜。堪聽下田踏海浪。志士心事違。仰天泣囚房。星霜幾風雨。蓮村潛居場。柱傾破壁落。一見惹暗傷。翁悲嘆愁絕。敢然復屋梁。欲慰千古恨。英魂應解慍。稻川稻生碧流靜。臺山蓮臺寺村帶錦裳。淳風翻天地。幽光滿豆陽。

示原兄

豆南一原兄未見善。善亦未見兄也。然既心契。又夙聞探究松陰先生下田踏海之舉。不堪感激。賦一詩示之。

鯉素盡史蹟。髣髴似在前。先師踏海事。一讀思悄然。自今與誰語。望斷孤鴻天。

和學半河野先生蓮臺寺會遇之詩

不圖邂逅客中身。男子立談情義親。此去故山三百里。欲報松下鎮祠神。

次韻河野先生之詩

相逢俱嘆水雲身。唐突猶看豪氣新。出廓送君山影暗。明朝客路與誰親。

豆南所見

豆南一日似賓鴻。先後相追山水中。樹影殘蟬秋已動。輕塵掃盡稻花風。

松陰先生略年譜

藩主 毛利齊廣	家 慶	藩主 毛利敬親
天保六年乙未 紀元二四九五年		
天保七年丙申 紀元二四九六年		
天保八年丁酉 紀元二四九七年		
天保九年戊戌 紀元二四九八年		
天保十年己亥 紀元二四九九年		

四月、養父(叔父)大助歿す、六月二十日、相續、大次郎と改名す、杉家に同居。高弟林眞人・玉木文之進・石津半七等家學教授を代理す。	六月、敬親(慶親)、藩主となる。この年、玉木文之進(二十八)國司辰子(十六)を娶る。	四月、敬親(慶親)、藩主となる。この年、玉木文之進(二十八)國司辰子(十六)を娶る。
九月、藩主齊元薨去し、世子齊廣その後を襲ぐも、十二月、江戸の藩邸にて薨す。徳川齊昭、砲臺を常陸助川に築く。	六月廿八日、米船「モリソン」號浦賀へ来る。浦賀奉行、太田資統、之を砲撃す。	六月廿八日、米船「モリソン」號浦賀へ来る。浦賀奉行、太田資統、之を砲撃す。
	正月、家學の兵學教授見習として藩校明倫館に出勤す。江川太郎左衛門、外國事情に就きて上申するところあり。	正月、家學の兵學教授見習として藩校明倫館に出勤す。江川太郎左衛門、外國事情に就きて上申するところあり。
	十一月、藩校明倫館に出勤、家學を教授す。家學高弟の代理教授は中止され、新に山田治心氣齋等がその後見人となる。	十一月、藩校明倫館に出勤、家學を教授す。家學高弟の代理教授は中止され、新に山田治心氣齋等がその後見人となる。
	五月十四日、渡邊華山、高野長英等捕はる。十	五月十四日、渡邊華山、高野長英等捕はる。十

天保十一年庚子 紀元二五〇〇年	二月十九日、華山は蟄居、同月廿八日、長英は永牢に處せらる。	十一月
天保十二年辛丑 紀元二五〇一年	藩主毛利慶親(敬親)の前にて「武教全書」の戦法篇を講述す。正月十三日、間部詮勝、老中となる。	十二月
天保十三年壬寅 紀元二五〇二年	初めて馬術を波多野源左衛門に學ぶ。五月九日、高島秋帆、武藏徳丸ヶ原にて、西洋式銃隊訓練を行ふ。十月十一日、渡邊華山自殺す。	十三歳
天保十四年癸卯 紀元二五〇三年	八日、叔父玉木文之進、松陰の後見を命ぜらる。玉木、松本新道に住し、私塾を開く、これを松下村塾と稱す。松陰、實兄梅太郎、久保清太郎(外叔久保氏の長子)と共に入塾す。この年また藩主の親試あり、松陰武教全書を講ず。十二月廿四日、幕府、海防整備のため、伊豆に下田奉行を、武藏に羽田奉行を置く。九月、父百合之助、百人中間頭兼盜賊改方に任ぜらる。九月祖母岸田氏逝去。	十四歳

天保十五年甲辰 紀元二五〇四年	九月、藩主の親試に「武教全書」と共に特に命ぜられて「孫子」の虚賞篇を講ず。藩主の感賞を得て、「七書直解」を賜ふ。この年、山田治心氣齋、江戸より歸り、松陰に向つて海外事情と諸外國の大勢等を説く。外叔久保五郎左衛門、隠退、村童を集めて教授す、これを久保塾といふ。藩後に松下村塾の名を襲用す。 十二月二日、改元、弘化元年となる。	十五歳
弘化二年乙巳 紀元二五〇五年	山田治心氣齋の説に従ひ、藩士山田亦介に就て長沼流兵學を兼修す。亦介、常に外夷の侵略と國防經營を論じて大に松陰を激勵す、松陰亦發憤天下の大事を以て任ずるに至る。 玉木文之進、山田治心氣齋、山田亦介、林眞人は松陰に最も影響を與へたる師なり。 三月十二日、幕府は諭告の形式により、浦賀の米船を去らしむ。 六月一日、幕府は、閑老の名を以て、オランダ政府に開國謝絶の返書を送る。 正月廿六日、仁孝天皇崩御、二月孝明天皇御踐祚。	十六歳 十七歳
弘化三年丙午 紀元二五〇六年	三月、山田亦介より兵要録の免許を受く。また藩士、林眞人の家に假寓し、家學を研究す。更に藩士飯田猪之助及び守永彌右衛門より夫々西洋陣法及び茨野流砲術を學ぶ。この年松下村塾（玉木）に入込み勉學す。 各國の艦船の來航相次ぐ。 八月廿九日、外警天開に達し、幕府に海防嚴戒の勅命下る。	十七歳

孝明

弘化四年丁未 紀元二五〇七年	三月、周防湯田に遊ぶ。 九月、「平内府論」を作つて、明倫館の文學秋試に應じ、その丙科に入る。 十月廿七日、林眞人より「大星目録」の免許返傳を受く。 二月十五日、幕府、相模、安房、上總、下總の海岸、守備を嚴にす。	十八歳
嘉永元年戊申 紀元二五〇八年	二月廿八日、改元。 高弟の家學後見を止む。明倫館再興に關する意見書を上る。杉家松本村清水口に轉宅。兄梅太郎明倫館に入り込む。 三月、外船對島北海に出沒す。	十九歳 二十歳

<p>嘉永二〇九年己酉 紀元二五〇九年</p>	<p>二月、明倫館の新築成り、松陰「兵學寮提書」及び「門弟等級之次第」を定む。その功によつて賞を賜ふ。 三月十七日「水陸戦略」を著して外親御手當方へ提出す。次で御手當御内用掛となる。 六月、藩命を受け、須佐、大津、豊浦、赤馬ヶ關等の海邊沿岸を視察す。 十月、その門人を連れて城東羽賀ノ臺にて演習を行ふ。 十二月廿五日、幕府、諸大名に命じ、沿海邊境の警備を嚴にせしむ。</p>	<p>二十歳</p>
<p>嘉永三〇年庚戌 紀元二五一〇年</p>	<p>家學及海外事情研究のため九州に旅行す。 八月廿五日、萩を發し、佐賀、長崎、平戸、熊本を経て、柳川、久留米に到る。十二月廿九日萩に歸る。この間、山鹿萬介、葉山佐内に師事し、宮部鼎藏、草場佩川、武富圯南等に交はり又蘭船唐館の狀を探究す。 六月十一日、蘭船、長崎に來り、英米二國の通商の意を傳達す。 十二月廿九日、相州沿岸の砲臺改築せられ、戦船が造らる。</p>	<p>二十一歳</p>

<p>嘉永四年辛亥 紀元二五一年</p>	<p>高野長英自殺す。 正月、林眞人より「極秘三重傳」の印可返傳を受く。又、同月、藩主、松陰より山鹿流兵學皆傳を受く。 三月五日、兵學研究のため藩主に從ひて江戸に遊學す。 四月九日、江戸に着、安積良齋、古賀茶溪、山鹿素水、佐久間象山に師事し、鳥山新三郎、宮部鼎藏、長原武、齋藤新太郎、江幡五郎等と交る。 六月十三日、宮部鼎藏と共に相州沿岸を視察し鎌倉瑞泉寺に伯父僧竹院を訪ね、廿二日江戸に歸る。 七月、東北地方遊歴の志を抱きその願を許さる。 十二月十四日、故あつて許狀を待たず亡命して東北遊歴の途に上る。先づ獨行して水戸に走る。水戸にて同行の盟友、宮部鼎藏、江幡五郎を待合せ、西山及瑞龍山に遊ぶ。 米船、土佐の漁師萬次郎等を琉球に護送し來る。</p>	<p>二十二歳</p>
<p>嘉永五年壬子 紀元二五二年</p>	<p>正月二日、再び水戸に歸る。同月四日、更に銚</p>	<p>二十三歳</p>

嘉永二五一年甲寅

二十三歳

家定	嘉永二五一年甲寅	<p>子、鹿島、潮來に遊ぶ。十一日、水戸に歸る。水戸にて會澤安(正志齋)、豐田彦二郎(天功)、宮本庄一郎、永井芳之助等を訪ふ。</p> <p>正月廿日、水戸を發し、白河にて江幡と別れ、宮部と二人で、會津・新潟・出雲崎を経て佐渡に渡り、順徳天皇の御陵を拜す、これより秋田・弘前・青森・盛岡・仙臺、米澤等の諸地を経て四月五日、江戸に歸る。</p> <p>四月十日、江戸の藩邸に入り、亡命罪に就ての下命待罪をなす。</p> <p>四月十八日、歸國の命を受け、江戸を出立、五月十二日郷里萩へ着き、清水口の柵家に屏居謹慎す。この間大に國史國典を讀み皇國雄略の精神を養ふ。</p> <p>十二月九日、士藉及世祿被奪。松次郎と改名す。この年十一月頃より松陰の號を用ひ始む。</p> <p>五月二日、幕府は彦根藩をして、西浦賀千代時の砲臺を管せしむ。</p> <p>九月廿三日、明治天皇御降臨。</p>	二十四歳
紀元二五一年癸丑	<p>正月、寅次郎と改名す。</p> <p>藩府は松陰の十ヶ年間諸國遊學を許す、依つて</p>	二十四歳	

嘉永二五一年甲寅

二十五歳

家學研究のため諸國に遊歴、正月廿六日、萩を發し、讃岐・播磨・河内・大和・伊勢・美濃・信濃を経て、五月廿四日、江戸着。この間、坂本那齋・後藤松嶺・森田節齋・谷三山・足代弘訓・齋藤拙堂・氷沼久太夫・森仲助等と交る。

五月廿五日、伯父竹院和尚を鎌倉に訪ね、六月一日、江戸に歸る。

六月三日、佐久間象山を訪ね、四日に米澤浦費に來るを知り、直ちに同地に赴く。その情況を觀察して、十日、江戸に歸る。此の時、將及私言「急務條議」必勝策等の時事對策を建議す。

九月十三日、再び鎌倉に竹院を訪ね、十五日歸る。

九月十八日、意を決して、長崎來泊中の露艦に乗り、海外に渡航せんと計り、この日、江戸を立つて長崎に向ふ。

十月朔日、途中京都に入り、皇居を拜し、山河襟帶之詩を賦す。又桑川星巖を訪ふ。

十月廿七日、長崎に至るも露艦既に去る。

十一月十三日、歸萩。滞在數日にして同岸者宮部鼎藏、野口直之尤と共に東上す。

安政元年甲寅
紀元二五一年

十二月四日、京都に着。梁川・梅田・森田・鶴飼等を訪ね、八日發、伊勢にて足代・土井・松田を、尾張にて奏・奥田・伊藤等を訪ひ、廿七日、江戸に着。
六月三日、ペルリ、軍艦四隻を以て浦賀へ来る。江戸市内戒嚴。
七月十八日、露使ブチャーチン軍艦四隻を以て長崎へ来る。

二十五歳

正月七日、相州へ往き、沿岸防備の状を調査しつゝ滞在すること十日餘、歸つて海戦策等を藩主に呈す。
此頃、松陰、米使暗殺を思謀したるも中途にして之を止む。
三月五日、米艦に搭乗し海外渡航を計らんと決意し、金子重輔と共に江戸を發し、途中佐久間象山に會し又竹院を訪ね、十八日、下田に着く。爾後苦心その機を俟つ。三月廿七日夜、遂に米艦に上りその志を述べ、懇請したるも容れられず、翌廿八日自首して縛に就き、續いて下田平滑獄に投ぜらる。
四月十日、下田より江戸へ護送せられ、十五日

安政二年乙卯
紀元二五二年

江戸傳馬町の獄に入る。
九月十八日、幕府は松陰等の罪を斷じ、併せてその關係者たる佐久間象山等を夫々罰す。
九月廿三日、江戸より檣送せられ、十月廿四日萩野山獄に入る。金子重輔は岩倉獄へ入る。
松陰獄中に於て回顧録、幽囚録等を作る。
なほ本件に關し、父百合之助、兄梅太郎、叔父玉木文之進等は何れも謹慎中なりしが、この月に許さる。
三月三日、幕府、米國との和親條約に調印。十二月廿一日、露國との和親條約に調印。下田・函館・長崎等の港が開かる。
十一月、改元。

二十六歳

正月十一日、金子重輔・岩倉獄中にて病死す。松陰その死を悲しみ、金子の行狀記を撰し、自らの食費を節約して金百疋を積み、墓碑建立の資金として遺族に贈る。
この月、松陰「士規七則」の撰をなす。
三月、周防の海防僧月性、萩に來り、松陰と文通をなす。
四月十二日、獄中にて「孟子」の講義を始む。

<p>安政二五年甲子辰 五月五日、米國と本條約交換。</p>	<p>その教化著しく、府囚の俳人吉村善作、漢學者富永有隣等先づ服し、司獄福川岸之助等も亦自ら進んで松陰に師事す。藤田來り、詩詞を文に十二月十五日、免獄となり、杉家に禁錮となる。外間との自由交渉は許されざるも、附近の子弟にして私に來り教を乞ふ者次第に多くなる。立の十二月十七日、眞室にあつて沓尾、五子等の講筵を續く。一月、金干原神・岩倉屋中より講筵す。</p>	<p>二十六歳</p>
<p>安政二五年丙辰 四月十五日、幕府梵鐘を大小砲に改鑄の命を發す。</p>	<p>三月廿三日、時局條約の調印。 四月十五日、幕府の味方、時局條約の調印。 四月十五日、新報生親の著作、時局條約の信念を披瀝す。</p>	<p>二十七歳</p>
<p>安政二五年丙辰 六月十三日、孟子の講筵を終る。これを「講筵餘話」といふ。</p>	<p>六月十三日、孟子の講筵を終る。これを「講筵餘話」といふ。八月、近親子弟のため武教全書を講す。門生潮く加はり半ば公然と松下村塾の教育に乗り出す。九月四日、外叔、久保五郎左衛門の依頼により、松下村塾記を作り、自己の教育理想とする。まゝるを述ぶ。時八開、山崎さ夫大開を。十月、松陰の筆力に依り、野山獄内の囚人板敷、免獄せらる。松陰の筆力に依り、野山獄内の囚人板敷、免獄せらる。松陰の筆力に依り、野山獄内の囚人板敷、免獄せらる。</p>	<p>二十七歳</p>

<p>安政二五年丁巳 三月廿九日、外弟の久保清太郎、江戸より歸萩し、松陰と共力して、邑學の振興を計る。玉木仕官後一時久保氏が襲用し居たる松下村塾も事實上、所謂松陰の「松下村塾」となる。</p>	<p>十二月十八日、梅田雲濱、萩に來り松陰と會見す。 三月十二日、幕府、駒場に於て始めて洋式訓練を行ふ。 三月廿五日、幕府、始めて講武所を設く。 七月十八日、大坂の木津安治兩川口に砲臺を築く。</p>	<p>二十八歳</p>
<p>安政二五年丁巳 十一月五日、杉氏の宅地内に在りし八疊の小屋を修理改造して塾舎に當つ。當時の門人十五六名。この小塾が漸く世間に注視され、塾生も日に増加するに至る。</p>	<p>七月、松陰は野山獄の友人、富永有隣の放免願ひに成功し、この月廿五日「松下村塾」の賓師として迎ふ。 十一月五日、杉氏の宅地内に在りし八疊の小屋を修理改造して塾舎に當つ。當時の門人十五六名。この小塾が漸く世間に注視され、塾生も日に増加するに至る。 十二月、松陰の妹、文子、門人久坂義助(玄瑞)に嫁し、杉家に同居す。 八月四日、露使ブチャーチン長崎に再來す。</p>	<p>二十八歳</p>

十月廿一日、將軍、ハリスに引見す。
 十二月二日、老中堀田正睦、ハリスに國書返翰を與へ、その交易、並びに公使の江戸駐在を許可す。
 十二月四日、米國に江戸・大坂・兵庫・新潟の四港を追加開港す。
 十二月廿九日、幕府、日米條約の可否を諸侯に諮詢す。

安政五年戊午
 紀元二五十八年

二十九歳

正月六日「狂夫之言」を作り、尊皇論に基き國政藩政に忌憚なき批判を述べ。
 二月、竹島開拓意見を披瀝す。
 内外の情勢、日々に迫るにつけ、藩校明倫館と松陰私塾なる松下村塾との間にやゝ疎隔の風を生ず、僧月性の來萩と共に、努めてこの兩者間の調和を計る。
 三月、松下村塾舎増築、十疊半を加ふ。この頃より、須佐の育英館と松下村塾との交渉親密となり、互に交換教授練磨をなす。
 四月中旬、感冒のため臥床十數日、健康やゝ傷ふ。
 この頃、日米條約調印可否に關する幕府の諮詢

萩に達す、五月、松陰は「對策」、「愚論」等を草して、京都の梁川星巖に贈る。星巖はこれを天覽に達す。
 六月、更の中谷正亮の上京に依託し、「續愚論」を星巖に送る。
 七月廿日、家學教授を許可さる。
 廿六日、塾生數名上京、彦根奉還事件を偵察。この前後を以て松下村塾の最盛期なりとす。
 八月、戊午密勅下る。
 九月九日、水野土佐守暗殺につき、當時江戸滞在の門人松浦松洞に一書を與へて、その策を云す。
 廿七日、大原三位重徳長門下向を策す。
 安政大獄始る。
 十月、赤根武人に伏見毀獄策を授く。
 十一月六日、老中間部詮勝要撃を策し、門生十七名の盟約成る。
 廿九日、藩命によつて嚴囚。
 十二月五日、投獄の命下る。六日、門弟八名謹慎。廿六日、投獄、野山獄に赴く。
 十二月廿九日、水戸密使關鐵之助、矢野長九郎來萩、松陰は獄中より彼等と畫策せんとしたる

安政六年己未
紀元二五一九年

も成らず、兩人は翌年の正月七日まで在獄して去る。
六月十九日、井伊大老專断にて日米通商條約に調印。

三十歳

正月十五日、毛利公の参観途上を要し、その駕を枉げて京都に迎へ、尊皇の魁らんとして所謂要駕策を樹つ。
この日播州の大高又次郎及び備中の平島武二郎の二人來萩。松陰は門人をして奔走参畫せしめたるも事成らず。
廿四日、時事に悲憤の餘り絶食す。
二月廿四日、門人野村和作をして要駕策のため脱走せしむ。廿八日、兄入江杉藏この事に坐して入獄。
三月五日、藩主東上、参観の途に就く。
二十二日、野村和作も捕はれて入獄。
この前後より、門人一部には、松陰の理論と實策とを時機尙早のものとし、敬遠の傾向ありたるも結局松陰の尊皇大義の精神に集約せらる。
五月十四日、江戸へ檣送の命來る。
廿四日、司獄福川厚之助の厚意により、自宅に

明			
治			
明治二十五年壬午 紀元二五四二年	十一月、東京世田ヶ谷若林に松陰神社を建つ。	て父母近親と訣別の辭を交はす。廿五日、歸獄、權輿萩を發す。 六月廿四日、江戸藩邸着、藩史の取調べを受く。 七月九日、幕史の取調べを受け、傳馬町の獄に投ぜらる。 九月五日、十月五日兩度の訊問を経て、十月十六日、口書讀み聞かせらる。 十月廿日、郷里の父兄其他に永別の手書を認め且つ目前の死への決心を靜かに録す。廿六日、「留魂録」成る。 十月廿七日、この朝、評定所にて死刑の申渡あり、正午前傳馬町獄刑場で、その生涯を終る。 廿九日、小塚ヶ原回向院に葬る。 五月廿八日、幕府、神奈川、長崎、函館の三港を開く。英米佛露蘭の五ヶ國に貿易を許す。 十月七日、橋本左内、頼三樹三郎等刑死。	二 十四 年 後
明治二十二年己丑 紀元二五四九年	二月十日、特旨贈正四位。		三 十 一 年 後

松陰先生略年譜

二六

明治二十三年庚寅
紀元二五五〇年庚寅

萩に松陰神社を建つ。

三十三年後

昭和十七年二月十五日印刷
昭和十七年三月一日發行

下田に於ける吉田松陰

● 定價壹圓五拾錢

有所編作著

著作者

福本義亮

發行者

小川菊松
東京市神田區錦町一ノ五

印刷者

小林浩齊
東京市板橋區練馬南町一ノ三五三二

東京市神田區錦町一ノ五

發行所

株式會社

誠文堂新光社

會員番號一一四五〇六番
電話神田二二六二二九番
振替口座東京六二九四番

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

(株式會社日本印刷局印刷)

るす資に養修民國
書の國憂生先本福

吉田松陰の母

新體制下日本女性必讀の聖典 吉田松陰研究家福本先生が心魂を傾けて描ける殉國士松陰先生の母杉瀨子の全生涯。維新同天の志士が如何なる母の手で育てられたか。偉人を生んだ母の生涯には涙ぐましく刻苦努力があつた。著者は新なる資料のもとに熱意を以て執筆してゐる。現下の日本女性に必讀を奨める書。

福本義亮著 定價 一圓八十錢
送料 二十一錢

吉田松陰の殉國教育

吉田松陰先生はかの著名な松下村塾に於て至誠を以て門生に臨み大義名分の活教育を施された。本書はその殉國教育を詳細に説かれたもの。一億國民の修養書。

定價 六・〇〇 送料 三三

吉田松陰の最後

孫子は昔から兵書として知られるが、武人のみならず、國家の各方面に活躍する人々に必讀の書。本書は正に活きた註釋ともいふべきもの。好評噴々！

定價 三・五〇 送料 三三

吉田松陰殉國詩歌集

本書は吉田松陰先生が燃ゆるが如き熱意と愛國至情を以て綴られた詩歌の集大成で、読み方は勿論時代を説き、出典を明らかにし訓註として完全無比。

定價 六・五〇 送料 三三

盡忠殉國、烈々熱火の如き吉田松陰先生の至情至誠こそ、今や非常時局に際し日本國民はひとしく學ばねばならぬ。本書は松陰研究家として知らる著者の傑著。

定價 三・八〇 送料 二二

水戸學研究の權威

高須博士快心の三著

大日本史研究の精華・著者の博士論文

水戸の「大日本史」は頼山陽の「日本外史」の粉本となり明治維新の最大原動力となつた極めて有名な書である。しかしこれに就て學的研究を行つたものは本書以外にない。本書は「大日本史」に就いて學的研究を行つた著者の博士論文。東朝・東日が筆を揃へて推稱する名著！

文學博士 高須芳次郎著 定價 三圓五十錢
送料 二十一錢

水戸學入門書として近來の好著

水戸學入門書として近來の好著 本書は義公・烈公を始めとして、安積澹泊・藤田幽谷・藤田東湖・台澤正志齋等を生み、維新同天の根幹をなした水戸學徒百數十名のかくれたる功績と事業を明かにしたものである。卷末には水戸學研究に必要な諸部門を特に設けて讀者の便をはかる。時局柄萬民必讀の書。

文學博士 高須芳次郎著 定價 二圓
送料 二十一錢

至誠の偉材東湖の全生涯を活寫する名著

至誠の偉材東湖の全生涯を活寫する名著 藤田東湖の傳記は數多いが、本書は最も平易に且つ正確に傳へたものである。著者は東湖研究のため水戸市の後援のもとに私財を投じ約一ヶ年に亘つて資料を集め、新研究のもとに書き下したもので、偉人東湖を彷彿させる。本書は實に生きた東湖傳といふべきもの。

文學博士 高須芳次郎著 定價 二圓八十錢
送料 二十一錢

菊池先生世の校閱
水戸學研究の聖典

本書は、紀元二千六百年記念事業としてその編纂が企圖され、今や完成して同志の諸君に頒つ。時局極めて多難の折柄國民精神を發奮興起せしめ以て翼賛奉公の微忱を致さんとするものである！

公を生み、烈公を生み、東湖先生を出し、憩齋先生を出した水戸は、明治維新同天運動の發祥地であり、水戸學は、大日本史編纂の骨幹として尊皇精神の淵源をなすものだ。本書はその水戸學の主なる著作十五篇を採録し、それに嚴正なる和譯及頭註を施し、菊池先生の精密なる校閱を経た水戸學研究の指針書である。

徳川罔順公題字
菊池謙二郎校閱
關山 延編

水戸學精髓

A5七一六頁函入
アイト口箱十頁
定價金七圓
送料/三十三錢

高須芳次郎博士の批評—水戸學に造詣ある菊池謙二郎氏が親切に解題を書き、その上本書の註解その他を校閱されたといふ以上十分に本書に信頼を置いてよいと思ふ。
關山氏は實業界の有識者で、平生藤田東湖を心から崇拜しその書を多く集めて東湖精神の發揚になかなか熱心で、氏が本書を編纂したのは最適任である。(日本讀書新聞所載)

次 目

- 進大日本史表 退食間話
- 大日本史叙 新 論
- 大日本史跋 進 論
- 大日本史表序論 下學通言
- 弘道館記 正氣歌
- 告 志 同天新
- 常 陸 帶 國體詩篇
- 弘道館記述義

931
134

終

